

蓬左

HÔSA



元和元年（1615）義直の購入書

周易（古活字版）慶長10年（1605）刊

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

蓬左文庫四〇〇年コレクション

蓬左文庫の開館は、昭和十年（一九三五）である。昨年開館八十周年を迎えた。一方、蓬左文庫の前身である尾張藩の御文庫を創設した初代義直の書物収集からは、四百年になる。次頁の表は、義直の蔵書から現在の蓬左文庫蔵書まで、蓬左文庫の蔵書構成を収集年代を追って一覧したものである。近現代の蓬左文庫の蔵書が多様な旧蔵者の蔵書によって構成されているのと同様に、「御」の字が示すあくまで藩主の文庫であった御文庫の蔵書にも、家臣等からの献納書など藩士の蔵書というべき書物がかなりの部分含まれていた。

すでに初代義直の収集書においても種村肖推寺（柴田勝家家臣、のちに剃髪して浅野幸長食客）から五四件二五六点、角倉素庵、平次親子（海外貿易、河川開発、木曾材木支配に関わった商人。素庵は江戸初期を代表する学者・文化人で蔵書家から一二件一二〇点の献本が記録され、その目録には金地院崇伝、林羅山、堀杏庵、沢庵、陳元賛等近世初期を代表する多彩な人物が献納者として記載されている。

御文庫に、尾張の学者、文化人の蔵書や著作が数多く納められるのは、一八世紀半ば以降である。八代宗勝、九代宗睦の學術振興政策により地誌や系譜集などの編纂も盛んに行われ、學術文化の開花期を迎えて尾張藩士の中から学者が育ち、蔵書

家とよばれる人物が輩出されるようになる。御文庫の蔵書目録からも藩士旧蔵の大部分は蔵書群の記載を確認することができる。二の丸庭園の北西角、かつての義直の書斎と目される「迎涼閣」の南に建設された「御側御文庫」の明治初年まで使用されていた三冊一組の「御側御書物目録」の半分以上を神村正鄰・忠貞親子の旧蔵書と松平君山家からの献納本が占めているのである。

神村正鄰・神村忠貞収集書

神村正鄰（一七二八～一七七一）は、岐阜の出身で、京都で学び、九代宗勝の招きで右筆となった人物である。当時の尾張は、義直以来の古代史研究が最盛期を迎えており、正鄰も、古代史や律令の研究を主催し、幕府の古書調査で発見された古代の法令『関市令』の誤りを正す成果を残した。また正鄰は、貴重な写本の収集で知られた蔵書家でもあった。正鄰は、後嗣のないまま蔵書を残して病死し、蔵書は一時親戚に預けられたが友人らは、門人の鈴木忠貞を、神村家の学問と蔵書の継承者として藩に願い出て認められた。極めて例外的措置であった。

神村を名乗った忠貞は、さらに京都で学び、学問と蔵書収集に努め、研鑽を積んで名古屋に戻ったが、病を得て急死。再度の例外措置はなく、正鄰・忠貞の蔵書約二千点は、藩に接収され御文庫に納められた。なお、神村家の親戚には、藩主の側近から内々で銀三枚が渡されたという。

「御側御書物目録」には、総数で七五一件約二千点の蔵書が収録されているが、正鄰旧蔵が一に對して忠貞旧蔵が二の割合と忠貞の精力的な収集がうかがわれる。内容は、九割以上が和書で古代史、有職故実、律令、和歌や物語の古典に加え、国絵図や城絵図などの絵図類も数多く含まれている。漢籍は、四書五経に属する「経書」が中心で、少数ながら『論語』の名品が揃っている。元応二年（一二二〇）書写奥書を持つ完本としては現存最古写本のひとつである『論語集解』（四頁参照）、安永三年（一七七四）、京都にいた広島藩の儒臣堀淡淵とともに『朱註論語』によって校訂したという『論語集解』や古註に属する『論語義疏』などいずれも室町中期の古写本である。

神村家の旧蔵書は、明治初年に三分の二が処分され、現在蓬左文庫蔵は、約一四〇〇点である。

松平君山家の蔵書

松平君山（一六九七～一七八三）は、寛保三年（一七四三）以来、八五歳で隠居するまで三十九年の長きにわたり尾張藩書物奉行の職にあった人物で、お目見え以上の格式を持つ尾張藩士各家の系譜集『士林沂洄』を完成させ、八代宗勝の命による最初の藩撰地誌『張州府志』など多くの書物編纂で中心的役割を果たした。

尾張藩士千村家の三男に生まれ、十三歳で同じ尾張藩士松平家の婿養子となった。君山の実母は、堀家の出身で堀杏庵の孫に当たる。のちに尾張学

界の中心人物となった君山には特段の師はなく、学問の手ほどきをしたのはこの母と伝えられる。君山の学問は、及ばぬ学はないといわれるほど広く、現在の薬学、生物学にあたる本草学においてさえ、先駆的業績を残している。

君山家の蔵書目録「吏隠亭蔵書目録」には、多くの編纂を手がけた君山にふさわしく守備範囲の広さを反映した多彩な内容の三千六百点余の蔵書とともに、堀家から借用した約五〇〇点の杏庵の蔵書が記されている。君山の蔵書は、その編纂を補佐し、継承したその子霍山（一七一九～八六）、孫南山（一七四五～一八三三）に引き継がれたが、学問の継承者をうしなつた南山の晩年、杏庵の蔵書は堀家に返却され、残された蔵書が藩に献納され御文庫に納められた。「御側御書物目録 君山本」に、収録されたのは、八八四件二四七三点である。君山の蔵書の明治初年処分は約七割と目される。

四〇〇年のコレクション

両家の旧蔵書は、御側御文庫の蔵書の中核を形成することになったが、この他にも、御文庫には尾張藩士が収集、または自ら記録、著述した書物が数多く納入されている。一覧にあげたのは、代表的な事例のみで、蔵書や著作の献納は枚挙に暇はなかつた一例である。

中村家は義直以来の尾張藩士で、厚齋（一七一〇～一七九一）、習齋（一七一九～一七九九）の兄弟以来漢学者の家でもあった。家塾を開いて多くの門人を

育てた同家は、嘉永四年（一八五二）家塾における講義録四百冊を御文庫に献納している。

天保八年（一八三七）頃、尾張藩士上田仲敏（一八〇八～一八六三）が伊藤圭介等とともに上田家の三の丸の屋敷に藩の許可を得て開いた蘭学塾「洋学館」の蔵書は、文久三年（一八六三）、上田仲敏の病死に伴う廃校によつて語学・医学・兵学・地理学・物理学などのオランダ語の書籍や『和蘭字彙』や『洋字篇』など四三件六七点が御文庫に献納された。

藩の補助のもと尾張医学館として知られた浅井家は、一九世紀前半、京都に門人を送つて製作した古医書の影写本を藩に献納した。

藩政時代にかぎらず、さまざまな経緯によつて尾張の学者の蔵書や著作が御文庫、尾張徳川家、蓬左文庫に収納され、戦後に至つては近代のコレクターの蔵書も加わることになった。蓬左文庫四〇〇年のコレクションは内容の充実と発展の道を模索しつつ、尾張文化のタイムカプセル形成の役割をも果たしてきたのである。（文庫長 桐原千文）

蓬左文庫蔵書の成り立ちと概要

蔵書数	年代	概要	所属
約6万5千点	～1616	駿河御譲本（徳川家康の蔵書）	御文庫
	～1650	初代義直の収集書	
	～1700	2代光友の収集書	
	～1872	歴代藩主・夫人・子弟収集書 藩士献上本・接收本 神村正郷・神村忠貞蔵書 松平君山家蔵書 中村習齋家講義録 上田仲敏「洋学館」蔵書	
	～1872	納戸方・茶道方等管理 歌書 絵図 諸役所蔵書 御記録（日記）所・寺社奉行所・町奉行所（神祇局・軍務局） 藩校蔵書 明倫堂	
約5万5千点	1873	徳川家維新史編纂所収集資料	尾張徳川家
	～1930	尾張徳川家収集資料 水野正信家蔵書 奥村得義家蔵書	
	1931	旧藩士蔵書	
	～1950	近松茂矩家・鈴木信吉家・尾崎良知家・五味末吉家 中村修家・阪本鈺之助家 旧蓬左文庫収集書 付属歴史研究室（現徳川林政史研究所）収集書 美濃高木家文書 大炊御門家文書	
	1951～	名古屋市蓬左文庫収集資料 寄贈・寄託コレクション 山田千晴旧蔵書（1962） 寄託 尾州茶屋家文書（1968） 小笠原家伝書（1971） 尾崎久弥コレクション（1972） 小酒井不木文庫（1975） 蟹江慶次郎旧蔵書（1982） 堀田文庫蔵書（1982） 寄託 雑賀重良旧蔵書（1983） 杉浦豊治旧蔵書（1996）	

コレクションが語る

蓬左文庫

のあゆみ

会期：平成二十八年

一月五日（火）→四月十日（日）

平成二十七年（二〇一五）十一月、尾張徳川家十九代義親^{よしちか}が、東京目白の邸内に蓬左文庫を開館してから八十年を迎えました。
蓬左文庫は尾張徳川家の歴代当主が収集した書物を中心に、貴重な古籍を多く所蔵しています。江戸時代後期には藩による学問振興にともなう新たな蔵書が加わり、蔵書は藩士たちにも広く活用されました。

明治以降にも旧藩士から寄贈された書物、名古屋の蔵書家から寄贈された本などが加わり、現在では極めて多彩なコレクションを所蔵しています。これらのコレクションとその収集過程は、それ自体が蓬左文庫の歴史を物語るものといえます。

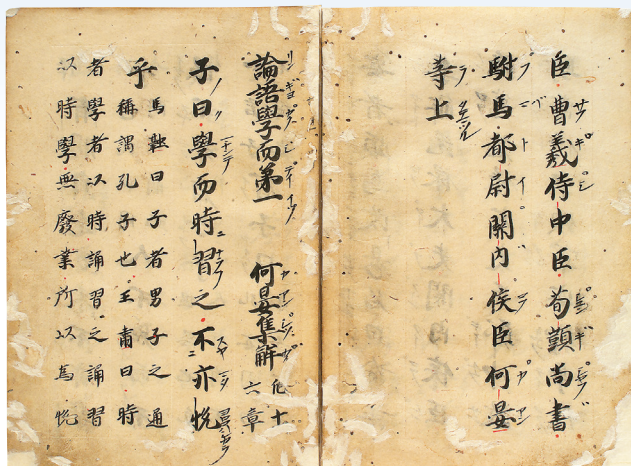
この展覧会では、江戸時代の「御文庫」、明治維新から蓬左文庫設立に至る黎明期、戦後の名古屋移転から現在まで、各時代におけるコレクションにスポットを当てることで蓬左文庫のあゆみを振り返ります。



獅子鈕陶印 印文「御本」
徳川美術館蔵

江戸時代のコレクション ―殿様と藩士の「御文庫」―

蓬左文庫の中核は、江戸時代における尾張徳川家「御文庫」の旧蔵書である。そこに含まれるのは、初代義直^{よしなお}以来の歴代当主が収集したコレクションだけではない。江戸時代後期には、藩の学問振興を受けて、藩士のなかにも膨大な蔵書を収集するものが現れ、その一部は尾張徳川家の文庫に献納・収集された（前頁参照）。こうして、尾張徳川家には全国有数の大名文庫が形成されたのである。



重要文化財 論語集解

元応2年(1320)奥書 神村家旧蔵 天明元年(1781)年献納

儒学の根本經典である『論語』に、中国・魏の何晏^{かあん}が注釈を加えた書物。奥書には豊前国吉田庄（現福岡県）で教円^{のりう}という人物が書写したことが記される。箱書きによれば、本書は佐野紹益^{さのしょうえき}（1607～91）所蔵本を、尾張藩士の神村忠貞^{かみむらたけさだ}が手に入れたものである。本書を含む神村家旧蔵書は、天明元年に尾張徳川家に献納された。



「迎涼閣」と「御文庫」 明治初年徳川慶勝撮影
徳川林政史研究所蔵

近代のコレクション —「蓬左文庫」の誕生—

廃藩置県直後、尾張徳川家は混乱のなかで一部の蔵書売り払ったが、幸い蔵書の大半は同家のもとに残された。その後は同家の維新史編纂にともなって収集された書物、旧藩士から献上された書物などが加わり、蔵書はむしろ増加していった。明治41年(1908)に尾張徳川家を継いだ徳川義親は、同家の蔵書に「蓬左文庫」と名付け、その整理と目録作成を進めた。そして昭和10年(1935)、自身の設立した財団法人尾張徳川黎明会のもと、東京目白の邸内に公開文庫としての蓬左文庫を開館したのである。



開館当時の蓬左文庫(東京目白)
昭和10年(1935)



青窓紀聞

水野正信編 文政元年(1818)～明治元年(1868)
水野正信旧蔵書 大正時代収集

尾張藩家老大道寺家の用人・水野正信が記した全200冊を超える幕末の風説留・日記。同僚の藩士や親類などから収集した膨大な情報を集積している。本書を含む水野正信旧蔵書は、義親のもとで大正時代に植松安らが調査し収集したコレクションである。

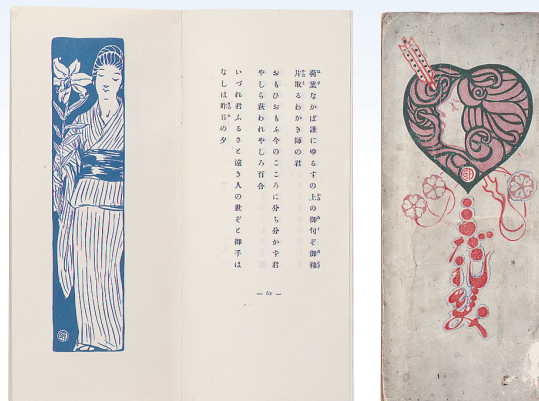
戦後のコレクション —「市民の文庫」へ—

昭和25年(1950)、蓬左文庫は黎明会から名古屋市に移管され、蔵書も名古屋に里帰りした。名古屋移転後、蓬左文庫は地元のコレクターや旧家から蔵書の寄贈を受け入れ、その数は5万点以上におよぶ。蓬左文庫は大名文庫としての顔だけでなく、『名古屋叢書』のような資料編纂・刊行も行い(次頁参照)、より多彩なコレクションを収集・公開する「市民の文庫」としての性格を備えるに至っている。

みだれ髪 初版本

与謝野晶子著 藤島武二装幀・挿絵 明治34年(1901)刊
雑賀重良旧蔵書 昭和58年(1983)寄贈

「君死にたまふことなかれ」の短歌で知られる歌人、与謝野晶子が初めて出版した歌集『みだれ髪』の初版本。装幀・挿絵はロマン主義的な作風で知られる洋画家・藤島武二が手がけた。本書は和歌書コレクターとして知られた雑賀重良(1900～83)が収集し、没後間もなく蓬左文庫に寄贈された12,000点を超えるコレクションの一冊である。



『名古屋叢書』が生まれるまで

蓬左文庫と『名古屋叢書』

蓬左文庫の書庫の奥には、丁寧に製本された二百冊近い手書き原稿が眠っている。それらの頁をめくると「郷土志料名古屋叢書編纂室」と印字された用紙に、びっしりと歴史資料を書き起こした文字が並んでいる。

『名古屋叢書』とは、江戸時代の名古屋に関する歴史資料を活字化して収録した資料集で、正編・続編・三編まで全六十九冊（索引等含む）が刊行されている。後述するように、その編纂開始は戦前にさかのぼるが、実際の刊行は昭和三十四年（一九五九）から蓬左文庫を拠点に進められ、最終巻が刊行されたのは平成二年（一九九〇）であった。まさに戦後の蓬左文庫は『名古屋叢書』とともにあったと言ってよい。だが、その刊行に至るまでの困難な道のりは、ほとんど知られていない。ここでは、蓬左文庫の歴史を語る上で欠かせない『名古屋叢書』刊行までのあゆみを振り返ってみたい。

編纂事業の始まり

『名古屋叢書』編纂事業の始まりは、昭和十四年（一九三九）にさかのぼる。この年、名古屋市は市制施行五十周年を迎え、その記念事業の一つとし

て「郷土志料叢書」の編纂が取りあげられたのである。名古屋市はすでに大正五年（一九一六）、『名古屋市史』の刊行を終えていたが、この『市史』には資料編が備わっていなかった。同時期に全国で刊行された自治体史には資料編が付属するのが通例になっており、この点は『名古屋市史』の欠点と考えられていた。

また、すでに東京・京都・大阪ではそれぞれ『江戸叢書』『京都叢書』『浪速叢書』が刊行されており、名古屋における「郷土志料叢書」の刊行は、これらに対抗する意味もあった。こうして、昭和十五年（一九四〇）十月、「郷土志料叢書」の編纂が、「名古屋市史続編」の編纂とともに、市制施行五十周年記念事業の一つに決定したのである。

翌年一月、顧問に尾張徳川家の徳川義親、編纂委員に石田元季らが内定し、四月二十日には名古屋の観光ホテルで編纂協議会が開かれた（写真）。この間、二月十九日の編纂委員会で書名が「郷土志料名古屋叢書」に決定した。四月一日には市立名古屋図書館（現鶴舞中央図書館）の二階に「郷土志料名古屋叢書編纂室」が置かれ、編纂主任に県立小牧中学校教諭の市橋鐸磨が採用された。この市橋を中心とする編纂室が、実質的な編纂事務を担うこととなる。

困難に直面する編纂事業

華々しく立ち上がった編纂室ではあったが、役

所内での立場は不安定であった。市橋は、のちに当時のことを「〔図書館の〕下役共には居候的存在にしか写らなかつたようだ。そこで主人振つて、編纂室の面々を見下している。まるで小姑だ。何かというとすぐに交渉の多いタイピストや給仕に小言をぶつつける」（市橋著『思い出の名古屋叢書』）と振り返っている。また、編纂室の所管課は観光課↓社会教育課↓文化課↓庶務課とたびたび変更された。

こうした問題に加えて、時局に対応して叢書の内容にも圧力がかけられた。編纂委員会では当初、



郷土志料名古屋叢書編纂協議会
昭和16年(1941)4月20日
左端に県忍市長、右奥に顧問の徳川義親

第一冊目の配本を「系譜篇」の「士林沂洄」に決定して作業に入ったが、時局に配慮した市当局から「神国」思想を宣揚する「神祇篇」刊行を優先するよう指令が下った。だが、「神祇篇」てなものは、まだ所載書目も決定していない（市橋前掲書、五九頁）状態だったため、大急ぎで書目選定から始める事態に陥ったのである。それでも昭和十六年十月頃には神祇篇の原稿がほぼまとまったが、十一月末には戦局切迫のため印刷は一時保留された。

苦境はさらに続いた。昭和十七年一月には編纂を主導した^{あだのぶ}県忍市長が死去し、翌年一月には編纂委員の中心的存在であった石田元季が死去、更に同月には写字を得意とする編纂員の大脇鉄次郎^{おおわきてつじろう}が帰らぬ人となった。これを受けて、市橋は編纂体制の刷新を提案した。四月には尾崎久弥^{おざきひさや}ら新委員八名を加え、委員に校正などの実質的な業務を担わせることとした。さらに六名の書目検討委員を設け、未決定の書目選定を進めた。こうした改革の効果もあって、十八年度は市橋自身「最高潮時代」と称するほど事業が進展した。戦局の緊迫をよそに多くの原稿が完成し、神祇篇は追加予算によって印刷直前までこぎ着けたのである。

戦災から編纂室閉室まで

ところが、昭和十九年（一九四四）に入ると、戦況の悪化とともに戦時体制が一層強化され、編纂は行き詰まった。同年二月に閣議決定された「決

戦非常措置要綱」では、「平時的又ハ長期計画的事務及事業ノ停止」が掲げられ、編纂室職員は市橋と編纂員の渡辺幸治郎の二人にまで減員されてしまった。そして昭和二十年三月、空襲によって編纂室のある市立名古屋図書館が炎上した。原稿は辛うじて焼け残った地下室から発見されたものの、編纂室は市役所内への移転を余儀なくされた。敗戦後、編纂室は栄の市立公衆図書館内に移転したが、十月には編纂員の渡辺が人員削減のあおりで退職し、職員はついに市橋一人になってしまった。

そして昭和二十三年、編纂室は同年度をもって閉室することが決定し、わずかに残された望みも潰え、あとには約五万枚におよぶ原稿が残された。敗戦を挟んで八年をかけてまとめた膨大な未刊原稿の前に、市橋は「悲か、喜か、知らず、ただ滂沱^{ぽうた}として涙の湧き出ずるをとどめ得な」かった（市橋前掲書、一一頁）。

刊行実現へ

ところが、わずか十年で事態は一転した。名古屋市は昭和三十四年度から五ヶ年かけて、全二十五巻の『名古屋叢書』刊行を決定したのである。昭和三十四年は名古屋開府三百五十年・市制七十年に当たり、その記念事業として『名古屋叢書』刊行が浮上したのである。埋もれた原稿の存在を知る郷土史家や研究者らが、公刊を求める声を挙げ続けたことも後押しとなった。また、同じく市制

五十周年事業として企画された「名古屋市史統編」が、昭和二十八年から三十年代にかけて『大正昭和名古屋市史』として刊行されたことも影響したようである。

編纂事業の新たな拠点となったのは、昭和二十五年に徳川黎明会から名古屋市に移管された蓬左文庫であった。ここに至って、編纂事業は初めて安定した拠点を得たのである。

移転して間もない蓬左文庫にとって、年五冊ものペースで資料集を刊行することは大きな挑戦であった。事務局を担った織茂三郎^{おりもさぶろう}は休みを取る暇もなかったという。後に織茂が「ずいぶんと無謀な計画だった」と振り返る編纂事業を支えたのは、編纂委員として加わった市橋や尾崎ら、戦前から『名古屋叢書』に関わった人々の熱心な協力であった。特に市橋の熱意は、並大抵のものではなかったようだ。最後に第一回配本を前に、市橋が記したことを引用しておきたい。

自分の命あるうちには、とても目の目が拜まれないと思っていた「名古屋叢書」が、こんど開府三百五十年、市制七十年の記念事業として、いよいよ刊行せらるることとなった。いま現に一回配本の「金鱗九十九之塵^{こんりんくじゅうのちり}」の校正で指先を真赤にしてうなっている。これはまさに夢ではない（『中部日本新聞』一九五九年八月十日）

（学芸員 木村慎平）

元和元年義直購入書

江戸時代（十七世紀）

尾張徳川家初代義直が元和元年（一六一五）七月に京都で購入したとされる二三件一四三冊の書物の内、現在も蓬左文庫に伝来する八件五六冊である。尾張藩御文庫を創設した義直の記録上最初の書物収集であり、現在の蓬左文庫にいたる収集四〇〇年のはじまりを示す「最初のコレクション」である。

寛政年間（一七八九～一八〇〇）に編纂された「御文庫御書籍目録」に記載された義直収集書に、「此御本元和元年七月御買上」と記された書物がこれにあたる。この目録は収集者別内容分類目録で個々の書物について、詳細に収集者や伝来などの検証結果が記されている。

収集した書物は、中国の古典では「論語」をはじめ四書五経がすべて揃い、「三体詩」「古文真宝」「千字文」「古今韻会举要」「玉編」「元亨釈書」「仏祖宗派綱領」など詩文集や辞典さらに仏典も含まれている。和書では、『東鑑』『和漢合運図』『太平記』『保暦間記』など歴史書や歴史物語、軍記物語、『倭玉編』『節用集』『謡本』など辞典類から謡曲本まで含まれている。

これらは、すべて我が国の出版物であ

り、二三件中一六件が活字版である。当時我が国の出版界は活字版の隆盛期でキリシタン版や朝鮮王朝の金属活字印刷物の影響を受けて出版といえば活字印刷という時代であった。義直の書物収集のピークにあたる寛永年間（一六二四～四三）には、中国貿易によって流入する明・清の書籍が購入の中心であったが、この時期に義直が購入したのは、我が国で出版された新刊書だったのである。

なお『蓬左90号』で紹介した元和・寛永期に義直の収集を記録した「御書物目録」に記載された寛永二年（一六二五）までの収集書にこれらはすべて記録されているが、収集年月の記載はない。年月の記載があるのは前記の寛政期「御文庫御書籍目録」だけである。

慶長二十年（一六一五）五月七日、大坂城は落城し、七月十三日には改元して元和となった。大坂夏の陣に参戦した義直は、しばし京都に滞在し、七月十六日名古屋に向けて出発している。書物の購入が滞っていた京都と目される由縁である。

戦国時代の終焉と泰平の世の幕開けは、現在の蓬左文庫につながる義直の書物収集のはじまりでもあったのである。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【J R】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料 30分 120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※催事により変更することがあります。

■展示室／有料 一般：1200円 高大生：700円 小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【開架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時

【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

